

月例研究発表要旨

第284回 2018年7月4日
「冷戦期の文化対策
——女たちと本のプログラム」

越智博美

冷戦期日本における米国の文化政策を調べはじめてしばらく経つが、2017年にロックフェラー財団のアーカイヴを調べていたおりに出会ったひとつのフォルダに触発されてあらためて考えはじめたことがある。それは石井桃子が財団の助成を受けて渡米したおりの資料だった。

石井は、坂西志保の推薦で面接を受け、アメリカの図書館を回って子どもの現況を知りたいという希望を伝えた。そこからかねてより親交のあった児童文学書評誌『ホーン・ブック』編集長のバーサ・M・ミラーの推薦と尽力で、西海岸から東海岸、さらにカナダ、ヨーロッパまで、次々と彼女の行き先が開けていく様を語る数々の手紙は、後年石井が、村岡花子らと「家庭文庫研究会」を結成して子どもの本の翻訳や普及、また読み聞かせの実践を普及させていく決定的な契機となった。わたしが心を動かされたのは、その手紙そのものが、名もなき女性たちの熱き想いとそれがつなぐネットワークの存在を、手紙の束というかたちで語っていたことであった。

アーカイヴ資料はしばしば組織の名前で残されている。個人の名前が出てくるときには、その個人はえてしてその組織の要職につく人物、あるいはその組織にとって大きな意味を持つ人物だからであり、その大

半は男性の名前である。たとえばロックフェラーの助成金が石井を含めた日本の作家たちに与えられた創作フェローシップのプログラムにしても、もともとは、ロックフェラーの肝いりで設立された国際文化会館の代表松本重治とジョン・D・ロックフェラー三世の「ジョンとシゲ」お互いと呼び合うような友情がその基底にあり、またその人文学の助成プログラムにはチャールズ・B・ファーズという財団の人文学部門の人物が深く関わっていた。彼らの名前のフォルダはあるが、その助成対象になった石井はともかくとして、その石井を送り出すことに尽力した坂西志保や、石井を助けた数多くの司書たちのフォルダは作られない。

石井のフォルダは、アーカイヴそのものがしばしばジェンダー化されていることを意味してはいないだろうか。つまり「ジョンとシゲ」のような組織の上層部の人々の名前で成り立っており、その陰でしばしば女性の働きや声は見えなくなっている。言い換えれば、彼女たちの姿や声を見出すには、ひとつひとつのフォルダのなかの書類に分け入らねばならないという方法論上の困難をも語るのである。

「本」というメディアは、冷戦期の文化プログラムにおいて重要である。そもそも占領政策は、『フォーチュン』誌の日本特集（1944年）にすでに明らかなように（この特集の責任者のひとりには、議会図書館館長を務め、戦時中の文化戦略の要職についていた詩人アーチボルド・マクリーシュ）「文化を組織し直す必要」性として認

識されており、しかも「日本人がみずから行う」ことを促す、今で言う「ソフト・パワー」として認識されていた。その中で本は「武器」として、占領期の政策においても、またいわゆる『ロックフェラー・レポート』（1951年）で示された占領後の文化外交のシナリオにおいても有益な媒体とされていた。

たとえば何が翻訳されるのかといった問題は日米関係の構想と無縁ではないし、またあらたな子ども観と育児法が提唱されるにしたがい、子ども向けの本や、またその日本語も変わっていくだろう。そうした言説の空間をある程度統制しうるものとして、アメリカ文学研究やアメリカ研究も再度アメリカの（たとえばロックフェラー財団の）助成を得ながら導入されるが、そこに上記の女性たちは大きく関わってもいた。

なかでも坂西志保は、アーカイブの資料がまとまっておらず、言ってみれば「点」の状態で存在するのだが、その人生について不明な点が多いために「点」と「点」をつないでも線の状態になりづらい。たとえば占領後に米国大使館が翻訳すべき図書のリストとして出していた月刊誌『米書だより』の創刊の年にあるべき翻訳についてのエッセイを翻訳家として掲載し、ロックフェラー財団助成による東京大学＝スタンフォード大学アメリカ研究セミナーのある年には、参議院の外部委員としてラウンドテーブルに参加し、石井桃子のアメリカ滞在記『アメリカ文学の旅』の冒頭において「アメリカへ一年、勉強に行ってみる気ありますか？」と石井を誘い、1976年に大磯の自宅（伊藤博文の屋敷滄浪閣の離れ。屋敷は占領軍に接収されたのにもかかわらず離れであれ住めたとはどういうことなの

か？）にて死亡しているのが発見されたときには独身女性の孤独死といった報道をされたこの女性をどう考えればよいのだろうか。

ロックフェラー財団のフェーズの業務日誌、国務省の資料、議会図書館、神奈川近代文学館等に散らばる資料を読んでも点が線になりきらない彼女の資料そのものが、「ジョンとシゲ」の陰で不可視になる女性のアーカイブ資料のあり方を示しているようにも思える。坂西は、著述家として活躍したために資料が多い方だが、それでもなおまとまった伝記が出づらいのは、戦前にミシガン大学で博士号を取り、米国議会図書館で日本研究書のコレクションを国務省の要請に応じて築き上げたキャリア・ウーマンであったればこそ、戦後、敢えて目立って表に出るような振る舞いをしなかったということと無縁ではないだろう。

石井桃子、福田直美（坂西の元で米国議会図書館勤務、国際文化会館初代図書室長、石井や村岡と家庭文庫研究会を創設した）、村岡花子といった女性たちと坂西が形成していたネットワークを明らかにすることで、彼女たちの、目立たないが確実に作用していたエージェンシーを明らかにしてみたいと願っている。

第285回 2019年1月29日

「日本語教育からメディアリテラシーへ」

今村和宏

セミナー形式の最終例会の目的は、35年ほど携わってきた日本語教育を振り返りながら、常々留学生たちに伝えようと努めてきたことがじつは日本語母語話者が生き

るために身につけておくべきメディアリテラシーに密接にかかわることを示すことでした。

信濃毎日新聞（2019年1月26日）の一面トップの記事には「今年4月には外国人労働者の受け入れを単純労働分野にも拡大する新制度が始まり、5年間で最大約34万人を新たに受け入れ予定」とあります。聴衆の一人からは「受け入れ態勢が整わないまま大量の外国人が来日すると、社会との軋轢が生まれたり、人権侵害が起こったりする」と指摘されました。日本語学習の機会が法律上十分担保されていないと様々な不幸が起こり得るため、今後日本語教育の責任は軽くありません。それを確認してから本題に移りました。

そもそも日本語教育の世界に入るに至る遠因は、日仏学院（1973年～）ほかで出会った直接法と大学時代のサークル「留学生ともだちの会」（1976年）に遡ります。前者では、フランス語やロシア語の名人教師が媒介語なしで直接対象言語を使って体系的な言語教育を実践していたことに魅せられ、後者では、日本語力がそれほど高くない外国人とも「やさしい日本語」で深い話までできることを体験し、直接法の可能性を実感しました。

その後、1985年にイタリアのベネチア大学で日本語を教え始め、就任2年目には、イタリア人教授陣を説得して、文法対訳法による当時の教授法を直接法によるものへと促しました。その際、初級段階から語彙を日本語で定義する練習などで、会話力などの運用能力だけでなく、文法理解を深め翻訳の力を伸ばすこともできました。

一橋大学へ赴任した1991年当時わずか30名前後だった日本語学習者は2018年現

在では約200名まで増えています。当初から心がけてきたのは、①社会科学にふさわしい日本語を提供すること、②学習者の表現意図が日本語でも適切に伝えられるように手助けをすること、③自分で気づき、考え、批判精神を持つことの大切さを伝えることなどでした。特に②が重要です。日本語としての正確さは重要ですが、正しい日本語だとしても、学習者が母語で表現できる意図が日本語に直したときに大きく違ったニュアンスで伝わってしまうとしたら、それは不幸なことです。語感、ニュアンス、筆者や話者の視点に注意を払うように促す必要があるのです。

研究分野としては、①社会科学にふさわしい日本語の基礎となる「社会科学諸分野の語彙調査」、②語彙や表現に含まれる動的要素の分析、③教授法などに力を注ぎました。どの場合でも、研究成果を教育に還元するとともに、教育現場で研究の種を見つけるというのが基本的なスタンスでした。

②の「動的要素」は耳慣れない概念かもしれません。たとえば、終助詞の「よ」は、標準的なイントネーションでは、メッセージの内容を、話し手から聞き手のほうに向かって「軽く差し出す」動きの感覚があるのに対して、終助詞の「ね」にはそのような感覚はありません。話の内容を共有したり、相手に確認を求めたりするなら、話し手のほうに軽く手を回すような気持ではないでしょうか。このような違いを母語話者はある程度感じることができるので、それを日本語学習者にも感じてもらうことには意味があります。

このように典型的な動き（感覚）の違いを知るだけでは十分ではありません。同じ

「明日会議ですね」でも、語尾の「ね」で高く上がるイントネーション（相手を見上げる視線）なら、話し手に自信がないために情報の正しさを確認する意図がある一方、中程度の高さの「ね」なら、自分の持っている情報の真偽を念のために確認している程度でしょう。さらに、明らかに下降イントネーションで強い口調なら、自分の足元に言い捨てる動きのイメージに近いでしょう。その場合、明日会議があることは明らかかな事実で、その事実を相手に突き付けるように確認している、場合によっては、何らかの行動を促しているというニュアンスかもしれません。「よ」についても、「軽く前に差し出す」のではなく、下降イントネーションで「下に吐き捨てる」言い方でしたら、相手を不快な気持ちにさせるでしょう。このように、気持ちとイントネーションに連動している体の動きの感覚を学習者が知ること、文脈や自分の意図にそぐわない印象を話し相手に与えることのないようにできるわけです。

次は上級の日本語授業を実際に追体験します。日本経済新聞の記事「節電も積もれば仮想発電所」（2017年2月12日）を題材に、学生役の聴衆とディスカッションしながら、記事のどのような点に注目し、言葉や表現のニュアンス、筆者の価値観、立場などを、どのように浮き彫りにしていくのかをじっくり時間をかけて見ました。

まず、聴衆の一人にリード文（以下）を読んでいただき、最後の表現に注目します。

各地に散らばる太陽光発電や蓄電池などをインターネットでつなぎ、あたかも1つの発電所のように使う、「仮想発電所」と呼ぶ新たな仕組みが注目を集めて

いる。（中略）オフィスや住宅にある小型の発電設備が社会を変える未来の発電所になる可能性を秘める。

「可能性を秘める」とはどんな意味でしょうか。ほどなく、「可能性がある」「可能性が隠れている」「潜在的に可能性がある」などの答えが出てきます。「では価値判断としてはどうでしょうか」と質問しますがすぐには反応ができません。「これを読んだ人はどんな気持ちになるでしょうか」と尋ねると、「何かわくわくします」「今はまだ見えていませんが、明るい未来が見え隠れしている感じがします」との意見がでます。「つまり、明らかにプラス評価。期待が持てる状況があることを読者に伝えて、記事本文を読みたくさせる効果がありますね」と述べると、みなさん大いに納得した表情になります。

母語話者である日本人であれば、少なくともこのようなニュアンスを無意識にとらえていて、肯定的な気持ちで本文を読み進めるよう促されるわけです。ところが、学術用語を含め豊富な語彙を持ち、むずかしい内容を理解する力のある日本語学習者でも、このようなニュアンスを感じ取れてはいない場合が多く、そこに注意を向けることは重要です。

本文中盤の「ひとつひとつの設備は小さくても、それらを束ねることで大きな発電所に匹敵する電力をつくり出せる。」の「束ねる」という動詞のニュアンスも見逃せません。

「集める」と同義として片づけるのは問題です。「束ねる」には、バラバラだったものをいっしょにまとめるという意味があると同時に、そのまとまったものが何か新

たな価値を生んだり役立ったりするというニュアンスがあるからです。

最後の段落（以下）にも注目すべき表現があります。

もちろん、バラ色の未来が開けているわけではない。（中略）こうした壁を乗り越えて仮想発電所の実現に道筋をつけられるかは、天然資源の乏しい日本にとって重要な挑戦になる。

「壁を乗り越える」は「壁を克服する」と比較して何が違うことを学生役の聴衆の誰もが感じたようです。しかし、それを言葉にするのはそれほど簡単ではありません。何人かが表明する複数の意見をモデレートするうちに、「克服する」では「戦って打ち克つ／打ち負かす」意味があるが、「乗り越える」のほうは戦うことが前提ではなく攻撃性が薄いという点に辿り着く。留学生相手の実際の授業でも、教師が僅かに問いを挟むだけで、学生自らが納得の行く答えを見いだすことがほとんどです。

さて、やっとメディアリテラシーです。それは一般に①メディアが伝える情報やメッセージを受け手が主体的、批判的に読み解く能力と技術を指します。言い換えれば、メディアに騙されない能力とも言えます。

さらに、②メディアに働きかける力や③メディアの力と危険性を意識しつつ、自分自身がメディアとして発信する力を含めることもあります。

では、日本語教育がメディアリテラシーにどうつながるのでしょうか。ここまできると、聴衆から出てくる意見をまとめるだけで十分です。

文章の中で使われる価値観を含む語彙や表現のニュアンスは母語話者にとって無意識に受け取っているものなので、意識的に分析することはない。それをあえて分析すると、明示的に文章化されていない筆者の価値観や意図が見えてくるので日本語教育においては重要である。それをメディアリテラシーの文脈に置き換えると、ふだんは語彙や表現の微妙なニュアンスにより無意識に影響を受け続け、知らず知らずのうちに誘導されているかもしれないが、それを意識化できれば、そのような影響や誘導から自由になる可能性が生まれる。

このように、メディアが伝える情報やメッセージを受け手が主体的、批判的に読み解くための重要なツールが日本語教育で重要視されている内容から導き出せるということを聴衆とともに確認して、和やかな雰囲気の中で例会報告を終えました。

